

令和7年度大学入学共通テスト 「地理総合、地理探究」を振り返る

— 育成したい力と求められる授業 —

今回は、関西圏の高等学校で地理を担当されている先生方にお集まりいただき、令和7年度大学入学共通テストの「地理総合、地理探究」について話し合っていました。新課程になって初めての実施で注目した問題や正答率の傾向、授業を通して育成したい力や受験生に求められる力などについて、現役の先生方ならではの視点で振り返っていただきました。

なお、各校の「地理探究」履修者数と共通テスト「地理総合、地理探究」の選択者数は **表1** の通りです。〈座談会は2025年6月に行いました〉

*本コーナーでは「大学入学共通テスト」は「共通テスト」、「大学入試センター試験」は「センター試験」と略記しました。



1 令和7年度共通テストに感じたこと

— 「地理総合、地理探究」の問題をご覧になった印象は、いかがでしたか。

新先生 地理は、旧課程の頃から思考力を問う問題が多く、新課程になって大きく変わったという印象はありません。ですが、初見のデータをどう解釈するかという資料読解力を求められる問題が多かったという印象を持ちました。テーマでは、やはり防災やGISなどが出題されていたことが新課程らしいポイントだと思います。

森田先生 新課程で重視されている思考力や判断力を踏まえて、地理的事象を多面的に捉えるような視点がしっかり盛り込まれていると感じました。また、多様な資料や文章から判断させる問題や「サプライチェーンの仕組み」といった実社会を意識した設問が見られ、資料の読

解や活用という実践的な地理力を問うことを重視しているような問題が多く見られたと思います。

新井先生 旧課程の時から比べると、単一の知識だけでは解けない、知識を応用しながら自分で考えていく問題が増えました。

多久島先生 共通テストに変わった当初の1～2年目は、図版やリード文、会話文がとても長く、思考力より解答時間内に問題を解き終えるための情報処理力を問うているような問題が多い印象でした。しかし今回はそれが解消されて、問いかけはシンプルだけど、与えられた地図や地理的な条件から答えを導き出す、(情報処理力より)地理的な思考力の活用に重きを置いた問題になっていて、弁別性が高い問題になっていたのではないかと思います。

2 注目した問題と正答率の傾向

— 「地理総合、地理探究」の問題について、それぞれの学校で正答率にどのような傾向がありましたか。

多久島先生 本校で正答率が低かった問題の1つとして、自然環境と農業の特徴について正しい文を選ぶ**第1問 問2**が挙げられ、正答率が50%を下回りました。

新井先生 本校も低かったですね。選択肢の文章に下線部が引かれていないので、どこに着目すればいいのか分からないのだと思います。例えば、②の文章のように前半は合っていても後半が違うといった構成が分かりにくかったです。

※1：Ⅲ類（体育・芸術コース）を除くⅠ・Ⅱ類のみ。

表1 各校の「地理探究」履修者数と
令和7年度共通テスト「地理総合、地理探究」の選択者数

	「地理探究」履修者数/ 令和6年度3年生の生徒数	令和7年度共通テストで 「地理総合、地理探究」を 選択した生徒数
関西大学 中部部・高等部 (多久島 亮先生)	49名/142名 (うち理系21名・文系28名)	30名 (うち理系21名・文系9名)
大阪桐蔭中学校 高等学校※1 (新井 優希先生)	448名/484名 (うち理系327名・文系121名)	397名 (うち理系276名・文系121名)
大阪教育大学附属 高等学校池田校舎 (森田 浩司先生)	88名/159名 (理系・文系の分類なし)	84名 (うち理系70名・文系12名・分類なし2名)
兵庫県立 神戸高等学校 (新 友一郎先生)	219名/354名 (うち理系200名・文系19名)	209名 (うち理系191名・文系18名)

森田先生 本校は正答率 74% と高かったです。授業では必ず、何か一つを単独で覚えるのではなく、いろいろな見方・考え方ができるように、普段から知識を関連付けて考えて、知識をつなげながら理解するように伝えています。農業や農作物を学習している時には気候なども踏まえて考え、世界の衣食住を学習している時には自然環境も考えるといったように、単元を横断しながら、教科書だけでなく、資料集や地図帳、統計データなどさまざまな資料をできるだけ活用して、複数のページを一緒に見ながら知識を関連付けて導き出す力が必要だと思います。

新先生 本校では、第2問 問3（図1）の正答率が低かったです。キャベツといえば田原市というのは全国的に有名ではありますが、愛知県に住んでいた小学生の時に学習していますよね。これは愛知県の受験生にとっては有利な問題だったのではないかと思います。本来なら、問題中の主な流路、地形、調査結果の文章から思考して導き出すべきなのですが、「用水が開通したことで変化」とあり、系統地理の知識からすると「米」とミスリードする生徒が多くいました。さつま芋も、米以外の別の農作物だったら解きやすかったのではないかと思いますね。

多久島先生 中学受験を経験した生徒は、塾などで日本の地方ごとの特色を詳しく学習しています。そこで渥美半島はキャベツの産地であることが基礎知識として定着しているため、この知識があれば与えられた資料を踏まえなくても、解答できたのではないのでしょうか。近畿圏の中学入試は国語・算数・理科の3教科で受験できる進学校も多く、小学生の時に社会を深く学習しなかった生徒も多いですが、首都圏の進学校は社会を含む4教科の受験が必須であることが多く、この違いも影響していると考えています。

新井先生 本校では、地球温暖化と北半球・南半球の海陸分布や緯度との関係を考えさせる第3問 問5は正答率が低かったですね。問題文を読むだけなのですが、間違えた生徒は、「北半球は大陸の面積割合が高いだろう、大陸だから温まりやすく冷えやすい」という知識だけで捉えてしまったようです。

多久島先生 緯度と海陸分布の関係、地球温暖化の状況を踏まえて、日射を反射する海水が融解した北極海域で気温上昇が大きくなることを問題文から考えれば正答できる、実力差が反映される良問ですね。

新先生 植生分布と気候や地形との関係を問う第3問 問1もこれと共通した問題だと思います。使う知識は習得しておくべき基本的なことなのですが、初見の図を見



多久島 亮先生
関西大学中部・高等部
教員歴：25 年目、専門：都市社会学、
趣味：旅行、音楽・ライブ鑑賞



新井 優希先生
大阪桐蔭中学校高等学校
教員歴：10 年目、専門：社会地理学、
趣味：ドライブ・旅行



森田 浩司先生
大阪教育大学附属高等学校池田校舎
教員歴：18 年目、専門：歴史地理・
地理教育・防災教育・学校安全教育、
趣味：旅行、美味しいものを食べる



新 友一郎先生
兵庫県立神戸高等学校
教員歴：17 年目、専門：東南アジア地域研究、
趣味：海外旅行・国内旅行

問 3 レオンさんは、東三河地域の農業がなぜ盛んになったのかを探るため、農家への聞き取り調査結果と、地元の図書館で調べた統計などを次の資料 3 にまとめた。資料 3 中のア～ウは、キャベツ、米、サツマイモのいずれかについて、1960 年と 2006 年の収穫量を行政区別*に示したものである。作物名とア～ウとの正しい組合せを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 7

*2020 年時点。

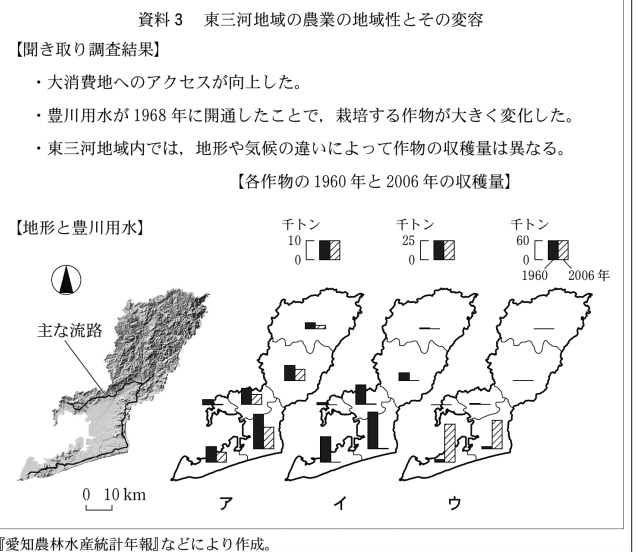


図 1 令和 7 年度共通テスト本試「地理総合・地理探究」第 2 問 問 3 解答：⑥

て、どの知識が必要かを考えて、その知識を活用して解答することが求められます。それは地理的な思考力ですし、これがまさに共通テストで求められている応用力や思考力なのではないかと思います。

森田先生 この問題は私も注目しました。問題文中の「正規化植生指数」の目新しさもあって、共通テスト後、受験生にテストの感想を聞いたところ、多くの生徒が、この問題が印象に残ったと答えました。乾燥した地域だけではなく高山が分布する地域も絡んでくるので、単純そうに見えても、資料を読み解く力が試された問題だと思います。

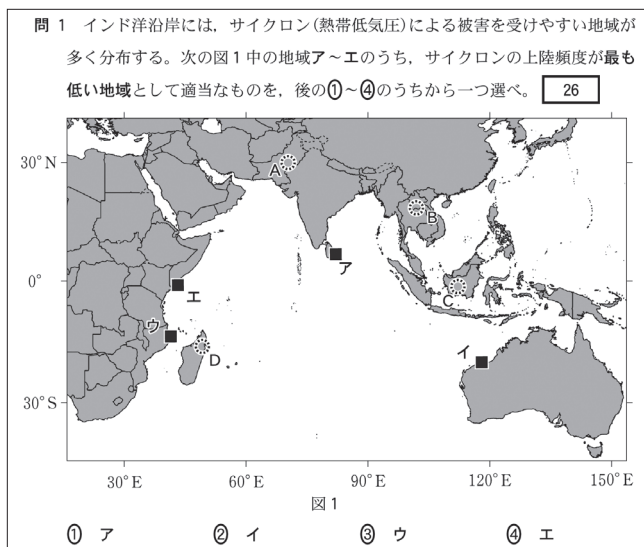


図 2 令和 7 年度共通テスト本試「地理総合・地理探究」第 6 問 問 1 解答: ④

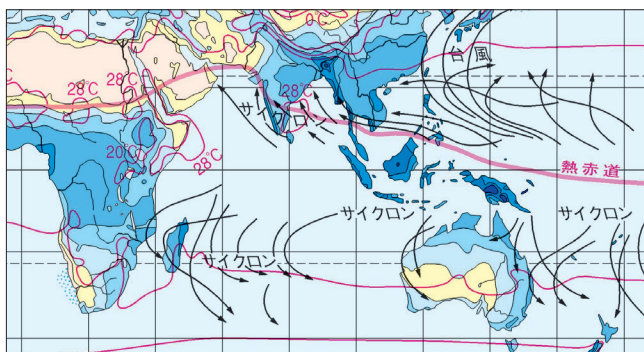


図 3 『新詳高等地図』p.143「①世界の気温と降水量 全年」(部分)

新井先生 第 1 問 問 3 のコーヒーと茶の 1 人 1 日当たり消費量に関する問題は、「この国ではこの飲み物」と教えることは少ないのでイメージしにくかったようです。生徒から「イギリスってコーヒー飲むんですか?」と逆に問われて、事例学習の難しさを感じました。

新先生 第 6 問 問 1 (図 2) のインド洋周辺地誌の問題もそうですね。インドとオーストラリアは熱帯低気圧が来ると『新詳地理資料 COMPLETE』 p.43 4 から分かりますが、アフリカを事例として取り上げないため、正答率が 20% ととても低かったです。これは、コリオリの力など、自然地理のメカニズムをきちんと理解していないと間違ってしまう。系統的なメカニズムの理解が重要だと思いました。

森田先生 熱帯低気圧の発生地域や進路をしっかりと理解しておくことが大事ですね。『新詳高等地図』 p.143 (図 3) や『新詳地理探究』 p.47 でサイクロンの進路を確認すると、アフリカ大陸東部のインド洋上のサイクロンは、赤道を境に南半球では南下することが多いというのが分かります。

多久島先生 この問題の正答率は、本校では 70% 程度で、全国平均の約 20.2% (大学入試センター発表) を大きく上回りました。これは、3 年間のカリキュラムの中で時間をかけて地誌を扱ったことと、過去問の演習を

重視したことが大きかったと思います。赤道付近で熱帯低気圧が発生しないことはこれまでも何回か出題されており、類似の問題をまとめて演習することは効果がありました。地誌の学習にあまり時間を割けない場合は、「北極海周辺地域」など広い範囲で地域を捉えることで、複数地域の類似点・相違点や関係性を比較的短時間で学ぶことができるのではないのでしょうか。

3 育成したい力と求められる授業とは？

—新課程で求められている力をつけるために、普段からどのような学習をするとよいと考えますか。

新井先生 新課程では、問題を見た時に、必要な知識を自分で引き出す力が求められていると思います。単なる暗記ではなく、必要な場面で知識を活用できるように、問題を解く時にどのような知識をどう使って解いているのかを意識しながら解くようにと生徒に話しています。

森田先生 単なる暗記学習ではなく、学んだ知識を関連付けさせながら、より深い学びと応用力を育成することが必要だと考えます。学んだ知識をつなぐ力を身に付けさせるためには、複数のデータを読み解く力、さまざまな資料を横断する力、さらには地理的な因果関係を説明する力などが必要です。そのためにも、多面的・多角的な見方・考え方ができるような授業展開を行い、社会的な課題との関連付けを意識した授業構成が大切だと私は思います。

新先生 「総合的な探究の時間」がハブになると考えています。例えば、「地理総合」で学ぶ RESAS は探究でも情報収集に役に立つよと言っておかないと、生徒が自分の課題研究をする時、探究のツールとしてつながってこない。だから常に、探究的な思考を身に付けられるような教科の指導を行っていくべきではないかと思います。探究をしっかりとできる生徒は、グラフの読み取りも非常に得意になっていきます。自分で調べてデータを集め、適切なグラフを作って探究するので、他教科にも応用できる力が身に付いています。

多久島先生 私は「人生は地理」とよく言っているのですが、皆さんの日常生活がどのような地理的な事象と関連しているか意識しながら生活しなさいと生徒に伝えています。生徒たちは各教科で習う内容はその教科内で完結したものと捉えがちですが、地理の学習内容は他教科と深く結びついており、それは他教科においても同じことです。日ごろから視野を広げる習慣を地理の学習を通して身に付けることで、社会に出てからもさまざまな局面で学びの力を発揮できるのではないのでしょうか。